科目区分　芸術文化課程・学校教育教員養成課程専門教育科目(選択必修)
科目名　　卒業論文（通年）
タイトル　大学での学びの総合

音楽科　岸　　啓子

１．授業概要

教育学部では芸術文化課程音楽文化コース・学校教育教員養成課程（音楽）ともに卒業研究がある。音楽の卒業研究は楽器演奏や歌唱など実技で行う学生が多く、論文を選択する学生は少ない。論文は実技関連のものでもよいが、実際は音楽教育または音楽学の領域で書かれている。担当者７名の内訳は、学教音楽専修１名、音文６名で、音楽文化コース（20名定員の最終学年）では例年にない人数となった。背景には管楽器専攻がなくなったため、音楽学専修として入学してきた学生が複数いたためである。そこで今年は卒業論文について報告する。卒論制作に至るまでの流れは以下のとおりである。

①分野の決定：現在の４年生は、入試段階で専攻を決定して入学している。入学後の専攻変更は可能であるが、管楽器専攻はない。なお現在の１年生から入試時点の選択受験科目と入学後の専攻のリンクはなくなった。

②研究領域と主題の絞り込み：１年生から音楽学、音楽史、音楽文化論など音楽学関連の科目を履修し、３年生の音楽学⑤⑥で卒論のおおまかな領域を決定し、主題選定を準備する。いくつかの主題についてシミュレーションを行い、小レポートを作成、遂行可能かどうかを検討する。１年生時点から卒業論文制作については周知しているので、学生は凡その主題または領域への希望を持っている。

③主題の決定：主題は４年生４月に確定する。決定のプロセスでは、学生の希望をできる限り尊重するが、論文制作経験の無い学生には、主題固有の難しさや１年間の作業量などへの想像が困難のため、教員側も指導助言を行い、ディスカッションの中で主題が決定される。

④授業：一人30分、
２枠と３分の１枠の時間を月曜日に設定。
実際は７名に毎回４～５時間かけた。

⑤授業形態：個人指導　事前準備は必須。前日に教員まで１週間の学習内容をメールし、教員はそれをプリントアウト、チェックして授業に臨んだ。論文制作が軌道に乗ると、論文の中身をファイルに添付して送付、それを添削して授業で返却し、内容について議論し、次週の方向を相談した。

７名の主題（略記）は以下の通り。

・モーツアルトの交響曲４０番―クラリネット有・無の２版の比較と現代クラリネットパートの作成　・モーツアルトのクラリネットコンチェルトのフリーメーソン的観点からの解釈　・ムソルグスキーの「展覧会の絵」について、ラベル版とその他のオーケストラ版の比較研究　・ベルク「ヴォツェック」―歌詞と音楽の解釈　・武満徹「秋庭歌一具」の分析と研究　・BGMについて　・トルコ行進曲―トルコ軍楽との関連および鑑賞授業の構築

２．アンケート内容は以下の通り。表現を簡略化している。

質問内容（解答は５段階評価）

問１　意欲的取り組み。
問２　出席状況。
問３　積極的に取り組み始めた時期（選択）
問４　就職活動・採用試験受験準備と卒論制作の両立。
問５　両立できた・できなかった理由
問６　卒論テーマ選定の自主性。
問７　卒論内容は教員と相談しつつ、自主的に構築できたか。
問８　制作が進むにつれて興味が増してきた。
問９　完成したとき、達成感を感じたか。
問１０卒論制作により、音楽や音楽文化について自分の考えが培われたり、得るところがあったか。
問１１　卒論制作が以下のことに有効であったか。
　１）知識の獲得　　２）音楽の理解
　３）論理的思考力　　４）文章力
問１２　卒論発表会のプレゼンテーションでは内容を解りやすく要約し、伝えることが出来たか。
問１３　卒論の授業（準備を含む）は何時頃開始するのがよいか。（選択）
問１４　この授業でよかった点

問１５　この授業で改善する方がよい点。(問５・１４・１５は自由記述)

３．結果と考察

授業規模が小さいので、比率ではなく人数での報告とする。

意欲（問１）、興味（問８）は他の（自分の）授業と比してかなり高かった。それぞれ７名中６名が５としており、あと１名も４であった。興味・関心の高まりは指導のなかでも強く実感できた。意欲の具体化としては、東京の研究所に資料を探しに行く、環境音楽を実践している京都市某所で、調査とインタビューを実施する、長野県のコンサートに赴き、実際の楽器の使用法を調べる、自筆譜ファクシミリ（出版されたファクシミリ）所蔵する図書館を調べ、借用を計る、楽譜の図形化を考案するなど、研究遂行に必要な小課題を自ら見つけ、そのための手段やスキルを自ら考えて獲得し、実践していた。また、アンケートを実施した学生は、自分自身の人間関係を中心に回答を依頼するなど、積極的な姿勢とともに高い対人能力と研究遂行能力の結合を示してくれた。意欲・興味の高さが高いパフォーマンスを生み、やはり６名が５と回答した高い達成感（問９）と意義評価（問１０）に繋がったと考えられる。指導教員の心構えとしては、命令・指令せず、それぞれの段階で何が必要かを、議論・相談の中で学生に考えてもらい、学生が自分で解答を見つけるようにした。この方針は主題研究に積極的に取り組み、深めようとする意欲的な学生の姿勢と今年は調和的であったと考えている。

卒論テーマの決定と内容の展開については、基本的には学生の希望を尊重している。しかし、レポートを数多く書いてはいても、「論文」制作未経験であるため、４月段階では主題・研究方法・内容・構想は極めて漠然としており、１年間では到底無理な研究を希望する例も多い。その場合は無理に縮小せず、核心に繋がる部分から取り掛かることを提案した。制作が始まると、自分のペースが掴め、到達圏内にある目標を再設定する時期がやって来るのを待ち、気付かない学生とは議論した。

卒論制作は、知識・理解・論理的思考力・文章力（問１１）の獲得・鍛錬に大いに有効であった・有効であったとする回答が殆どであり、また、実際教員から見ても回答通りであることから、この点でも卒論は有効であったと言える。

指導していて難しさを感じたのは、学生の他の重要事項である就活または、教員採用試験、または将来計画のための受験との両立である（問４）。４年生は大学の仕上げの年であると同時に社会に出てゆく準備の年でもあることを考えると当然のことである。一定の理解を示すことは必要であるが、状況に流されるクセをつけるのは為にならない。１対１授業であること、卒論の指導教員が学担でもあることを活用し、エントリーシート制作の相談に乗るなど、卒論指導の時間の後、就活について話題を向け、理解を示す努力をした。やはり個々の授業の枠を越えた一人の学生としての総合的成長を４年間通して見守り、次のステージを学生自らが開くための助言・助力を行なうことは重要であると強く感じた。

自由記述は、

- 教員と１対１で授業をすすめることができた。
- 小さな疑問も言葉にすることが出来た。
- 教員とじっくりひとつのことを話し合えてよかった。
- 主題に各方向からアプローチできた。
- 教員と１対１で楽しい雰囲気で授業ができたのがよかった。
- もっと時間があるとよいとおもった。

**卒業論文集計　７名**

| | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1意欲 | 6 | 1 | 0 | 0 | 0 |
| 2出席 | 5 | 1 | 1 | 0 | 0 |
| 4両立 | 0 | 4 | 2 | 1 | 0 |
| 6テーマ | 5 | 1 | 0 | 0 | 0 |
| 7内容 | 4 | 3 | 0 | 0 | 0 |
| 8興味 | 6 | 1 | 0 | 0 | 0 |
| 9達成感 | 6 | 1 | 0 | 0 | 0 |
| 10 意義 | 5 | 1 | 0 | 0 | 0 |
| 知識 | 5 | 1 | 0 | 0 | 0 |
| 理解 | 4 | 3 | 0 | 0 | 0 |
| 思考力 | 5 | 1 | 1 | 0 | 0 |
| 文章力 | 5 | 2 | 0 | 0 | 0 |
| 12発表 | 0 | 3 | 3 | 2 | 0 |